

2012年10月29日 佐藤徳之

## 1. 留学決意

東北大学において学部三年時に研究室へ配属されたときには、海外大学院はもとより国内での博士課程進学さえ考えていなかった私は、その後の経験を通して大きく将来の進路を変更しました。そして現在、Stanford 大学大学院の Electrical Engineering 科において、船井情報科学振興財団の支援のもと Ph.D 学生として充実した日々を送っています。

私は修士一年時にドイツの Ruhr 大学において研究活動をする機会を得ました。宮城県仙台市の自宅から十キロ圏内において小学校から修士課程までを過ごした私にとって、異文化を感じるまさに初めての機会でした。当時の私は、Ph.D 課程に進学するのは将来アカデミックの分野で活動すると決めた人達だけであり、専門性が高まる代償として視野が狭くなってしまおうといった偏見を持っていました。これは日本の大学生が一般的に持っているイメージと一致していると考えています。しかしながら、欧米において Ph.D 保持者はアカデミックだけでなく産業や政治の分野でも広く活躍しており、例えば多くの CEO が Ph.D の肩書きを持っています。何か一つを突き詰めて研究し成果を得たという経験は、実際には分野を超えて役立つことを示しており、欧米においては一般の人達もそのように認識していると知りました。研究に面白さを感じつつも将来の職業選択などを考慮し修士取得後の就職を考えていた私でしたが、全く逆の考えに正しさを見出し Ph.D 課程への進学を決めました。

また、ドイツで所属した研究室に欧米各国の大学院出身者がいたことも私にとって幸運でした。学生としての経験に加えて、複数の国で働いてきた感想を共有してもらい、アメリカにおける競争意識の高い文化が自分に合っていると考えるようになりました。トップ校で自分の力を試したいと考えていた私は、シリコンバレーの中心であり非常にオープンな研究文化を持つ Stanford 大学に興味を持つようになり、さらに憧れていた研究者が同大学の所属であることが決め手となり出願に至りました。

## 2. 大学院への出願

アメリカの大学院を受験するにあたり、まず私が力を入れたのは CV (履歴書) を魅力的にすることでした。これは Stanford 大学の教授より直接いただいたアドバイスに基いており、端的に言えば教授が欲しがるのは研究成果が期待出来る学生というものです。例えば筆頭著者である論文を一

本を持っていけば非常に大きな武器となります。欧米の大学では一般に Ph.D 課程の中盤から研究を開始するため、研究成果は日本の学生が優位に立てる数少ない要素であると考えられます。また、一般的には **Statement of Purpose** や **Recommendation Letter** が審査において最も重要であると言われており私自身も多くの時間を費やしました。Stanford 大学の場合、**Recommendation Letter** を提出していただく先生には「これまで自分が指導した中で、上位何%に位置する学生か」という質問項目があります。すなわち、推薦者の著名度もさることながら、自身との関係を考慮して依頼すべきであると考えられます。私の場合は、日本およびドイツでの指導教官と、学会会場での議論から関係を持つようになったイギリスの先生に用意していただくことが出来ました。

実際に最も苦心したのは志望研究室の教授に自分を売り込むことでした。アメリカの理系大学院では各研究室の教授が学生を雇うという構図であり、いくら入学審査会による書類選考を突破しても教授が手を挙げない限り合格するのは困難であるためです。私は入学審査前に志望する教授と二度話す機会を得ました。一度目は IEEE より渡航費援助を得て **Magnetics Society** のサマースクールに参加した際に、西海岸を経由する飛行経路を選択し Stanford 大学を訪れました。訪問に先立ち、最低でも希望する研究内容はスラスラ話せるように練習を重ね、併せて志望教授の関連論文や著書を読みあさり自分の修士論文と絡めた質問をいくつか用意しました。特にスピーキングは当時から苦手だったため、自分の音声を録音し納得出来るまで繰り返しました。当日はホワイトボード前でディスカッションを行うことになり、研究内容について予想外の質問を多くされたことに戸惑いましたが、多少なりとも好印象を与えられたとようでした。二度目の機会はアメリカで学会発表を行った際に得ました。残念ながら別予定のため教授に私の発表自体を見てもらうことは出来ませんでした。が、「ある講演内容をまとめたノートを送って欲しい」という課題を与えられました。最大のチャンスであると確信し、質疑応答だけでなく発表後にも講演者をつかまえて発表内容の理解に努めました。さらに、許可を得て録音したものをホテルで何度も聞き直しながらノートを作成しました。教授からの返信には、成績表や GRE のスコアを送って欲しいという旨が書かれており、さらに一歩駒を進めることが出来たようでした。

修士論文に追われながら出願の準備を進め、締め切り当日に三通の **Recommendation Letter** が揃ったところで出願を終えました。私が感じたアメリカにおける大学院受験の難しさは、複数のタスクを同時進行する能力が求められることです。TOEFL や GRE で高いスコアを取るだけでも一年以上は掛かりそうなところですが、並行して先に述べたような教授とのコンタクトや奨学金獲得、CV を充実させるための活動等を行う必要があります。特に理系学生であれば、研究に主を置いた生活を送りながらこれらを同時進行させなければなりません。当時は日本のような試験形式にして欲しいと考えていましたが、アメリカの大学院に入学した今では Ph.D 学生にどれだけ複数タスク

の管理能力が必要であるか痛いほど感じており、質の高い学生を選ぶための手段として実はよく設計されているのではないかと感じています。

出願から三ヶ月後、Stanford 大学の入学審査会から受け取ったメールに書かれていた内容は、修士課程への入学を許可するというものでした。私はすでに修士課程に在籍しており、経済的な理由からも、その条件であれば留学は諦めざるを得ない状況でした。志望研究室の教授からの連絡により、私は Ph.D 課程の補欠状態であることが分かりました。それからの期間は別の進路のことを考えつつ、不合格の場合でもいつかあの場所で働けるよう努力しようと考えようになりました。

その一週間後に受け取ったメールの一行目には、**Congratulations!** の文字が輝き、私はついに Ph.D 課程への合格を手にししました。合格した理由も添えられており、はっきりと「二年間の奨学金を得ているため」という記述がありました。つまり、私は船井財団の奨学金無しでは Stanford 大学の Ph.D 課程に合格することは出来ませんでした。改めてここで感謝の意を伝えさせていただきます。（船井奨学金の選考および合格通知はアメリカの一般的な出願期間前に行われます。これは日本人の留学生を支援する奨学金には大変珍しいことで、私の例が示すように入学審査に際に大きな武器となります。）

### 3. 渡米から現在に至るまで

まず、七月より受講したサマースクール期間の英語講座について述べます。Stanford 大学の英語講座は、他大学に入学予定の学生も多く参加するほど評判が良く、私も六週間の受講後に同様の感想を得ました。同講座は **Writing, Listening/Discussion, Effective Communication, Stanford Faculty Lecture** から成ります。ここでは特に多くの時間を費やした **Writing** について紹介します。日本人は聞いたり話したりが苦手な代わりに読み書きは得意であるというのが定説ですが、**Academic Writing** となると状況は全く違うということを六週間で思い知りました。ある課題では専門分野における複数の論文を要約し、言語学の先生および専門分野の先輩 Ph.D 学生から合計五回ほど添削を受けた上で最終版を提出します。基本的な文法は当然のことながら、例えばグラフから読み取られる情報の説明や参考文献の主張を記述する場合の主観／客観的動詞の選択、コロンやセミコロンを含めた句読点の正しい位置、等々を繰り返し指導されました。短期間で劇的に **Writing** 力を上げることは難しいながら、この講座において徹底的に自分の理解不足を知らしめられたことは非常に幸運であったと感じています。今もサマースクールで感じた危機感を胸に Stanford 大学の英文添削センターを利用して勉強を継続しています。

九月より開始した **Electrical Engineering** 科の新学期は、サマースクールに参加させていただいたことにより万全の状態を迎えることが出来ました。一般に留学生の場合は生活のセットアップに

時間が掛かり、多忙な状態で新学期を迎えざるを得ないのに対して、私はすでに現地での生活環境がすでに整っていたためです。

現在、授業開始から約一ヶ月が経過し中間テストの期間を迎えています。想像を超える課題の量や同級生の優秀さに圧倒されながらも、世界トップクラスの環境において勉強が出来る毎日は本当に充実しています。今後は本格的に研究を開始しさらに忙しくなる予定ですが、この素晴らしい機会を与えてくださっている船井財団の皆様に感謝を忘れずに、精一杯頑張ります。